

# ショスタコーヴィチの右手麻痺

神田 隆\*

ソビエト連邦の作曲家ドミートリー・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）は、筋萎縮性側索硬化症（ALS）に罹患した著名人の1人としてしばしば論じられる。しかし、彼を17年の間悩ませた右手に始まる筋力低下が何に起因していたかはいまだ明らかではなく、また、ALSを疑ったという医師側の記録も残っていない。本論文は、優れたピアニストでもあったショスタコーヴィチが残した録音と、彼の友人たちによる記録、写真などをとおして、この20世紀最大の作曲家が罹患した神経疾患を考察してみようという試みである。

**KEY WORDS** ショスタコーヴィチ, ALS, 前角障害, ピアニスト

## はじめに — 私とショスタコーヴィチ

ドミートリー・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ（Дмитрий Дмитриевич Шостакович；1906-1975）は1975年、筆者が医学部に入った年に死去している。クラシックの大作曲家というのは大部分が既に鬼籍に入った人であり、わずかな期間とはいえ同時代を共有した数少ない1人と言えるこの作曲家に、筆者はずっと関心を抱いていた。その大きなきっかけになったのは、1973年の5月、初めて来日したソビエト連邦（以下、ソ連）の大指揮者エフゲニー・ムラヴィンスキー（Евгений Александрович Мравинский；1903-1988）とレニングラード・フィルハーモニー管弦楽団による第5交響曲を聴いたことで、とにかく人生観が変わってしまうような大ショックを受けたこと、最後のバスドラムの8連打とともにいまでも鮮明に覚えている。しかし、その当時のショスタコーヴィチの日本での評価は必ずしも高いものではなかったように思う。ソ連の政治体制に迎合する時代遅れの御用作曲家と言いつつ音楽関係者は大勢いたし、1972年5月10日に日本初演が行われた彼の最後の第15交響曲も、冷淡と言ったほうがよいような迎えられ方をしていたように記憶している。

このショスタコーヴィチに対する世の中の見方を大

きく変えたのは、1979年に出版され、1980年に日本語訳が出たソロモン・ヴォルコフ（Соломон Моисеевич Волков；1944-）編の『ショスタコーヴィチの証言』<sup>1)</sup>という1冊ではないかと思う。「死後に西側で発表するように」という条件の付いたショスタコーヴィチからの聞き語りということで、内容の信憑性についてはいまでも論争の絶えない本であるが、筆者は日本語訳の発売と同時に神保町の書泉グランデで入手し、あまりに面白いので国試前にもかかわらず一晩寝ないで読了した記憶がある。スターリンとの確執、曲に隠されたメッセージとその二重性など、目から鱗が落ちることの連続で、筆者が大感激したムラヴィンスキーをこき下ろしている点のみは納得がいかないところであったが、ショスタコーヴィチの音楽にますますのめりこむようになったのはこの1冊のせい、と言ってもよい。この本の最後で、ショスタコーヴィチは自分の人生を振り返ってこのように語っている<sup>1)</sup>。

わたしの人生には、特別に幸福な瞬間などまったくなかったし、特別の喜びもまったくなかった。わたしの人生はかなり精彩を欠いた灰色のものであったが、このことを思い出すと、わびしくなる。それを認めるのはいいまいことだが、しかしそれでも、これは真実であり、不愉快な真実である。

山口大学大学院医学系研究科臨床神経学講座（〒755-8505 山口県宇部市南小串1-1-1）

\*[連絡先] tkanda@yamaguchi-u.ac.jp

健康で幸福であれば、誰でも嬉しいものである。わたしはたびたび病気になった。いまでも病気であるが、身体が健康でないために、ごく普通のことながら喜びを感じる可能性も奪われている。歩くのが難儀である。そしてわたしは、右手がまったく利かなくなる日に備えて、左手で文字を書く練習さえしている。わたしは完全に医師の手に運命を握られていて、このうえなく従順に、医師の指示を果たしている。わたしのために処方された薬なら、どんなに吐き気を催すものであっても、すべて服用している。だが、診断書はなく、医師たちは診断書を作ってくれない。

これがこれだけの作品を産み出し、世界的な名声を得た大作曲家の最後の言葉だろうか。ヴォルコフのこの本にはショスタコーヴィチの神経障害のことは最終章を除いてまったく出てこないし、筆者がショスタコーヴィチ筋萎縮性側索硬化症 (amyotrophic lateral sclerosis : ALS) 説を知ったのはこの後だといふ経てからのことである。この不幸な独白のもとになっている、約17年の間彼を悩まし続けた筋力低下はいったいどのようなものであったのか、と考えたのが本論文を執筆するきっかけである。

ショスタコーヴィチ ALS 説というのはかなり世の中に広まっているようで、Web 上ではホーキング博士、ルー・ゲーリック、毛沢東、デヴィッド・ニーヴンなどと並んで、ALS に罹患した有名人の1人として挙げられている。しかし、彼が ALS であったという決定的な証拠はどこにも存在しない。彼の残した手紙や入院生活の既往、身近な人々の観察、彼を診察した医師の発言などを頼りとして、また、彼が残したピアノ演奏の録音やスナップショットなどを手掛かりとして、この大作曲家を悩ませた疾患が何であったのかを脳神経内科医の立場からあらためて考えてみたい。ショスタコーヴィチの神経疾患については米国インディアナポリス大学の Pascuzzi らのグループがいくつかの論文<sup>2,3)</sup>を発表しており、本文はそれを参考にさせていただいたことをはじめに述べておく。

## I. ピアニスト、ショスタコーヴィチ

ショスタコーヴィチは極めて優秀なピアニストであり、いくつかの残された録音からもその非凡さは推定可能である。1927年1月にワルシャワで開催された第1回ショパン・コンクールにもソ連代表5人のうちの1人として出場しており、本人は優勝するつもりだったらしい。優勝者を決めるファイナリストの

8人には残ったが、このときは体調不良(急性虫垂炎であったと記録されている)に苦しめられたこともあって入賞すら逸し、名誉賞というおまけのような賞を得たのみでショスタコーヴィチのプライドはかなり傷ついたようである。このときの1位はソ連のレフ・オボーリン (Лев Николаевич Оборин : 1907-1974)。4位には同じくソ連のグリゴリー・ギンズブルク (Григорий Романович Гинзбург ; 1904-1961) が入っている。どちらもソ連を代表する大ピアニストである。2, 3位はポーランド人。Fay<sup>4)</sup>によると、2, 3位のポーランド人はポーランド側が国威発揚のために(ショパン・コンクールですからね)入れ込んだ結果で、ショスタコーヴィチは実は3位、オボーリン1位、ギンズブルク2位に次ぐ成績だったとのこと。ショスタコーヴィチがそのときどんなショパンを弾いたのか、筆者としては興味津々であるが、1927年ということでは残念ながら音としての遺産は残っていない(と思うが読者でご存じの方がいたら教えてください)。1906年生まれのショスタコーヴィチはこのとき21歳、19歳で第1交響曲を発表して既に新進気鋭の作曲家としての地位は確立されており、ショパン・コンクールでの苦汁は彼に作曲家へと大きく舵を切らせるきっかけとなったようである。

1940年代後半になって、録音技術の進歩とともに(その頃のソ連の録音技術はお世辞にも世界最高水準とはいいがたいが)、ショスタコーヴィチは自作の録音を積極的に行うようになっていく。第10交響曲のピアノ連弾用編曲の録音が残されている。1954年2月15日、モスクワでの録音で、友人の作曲家モイセイ・ヴァインベルクとの連弾。ショスタコーヴィチ自身は第2ピアノを弾いている。まさに火の出るような演奏で、この時点で手の故障があったとはとても思えない。しかし、1958年(1959年?)を最後にレコード・カンパニーによる正規録音はばたりと姿を消している。1963~1964年ぐらいまではリサイタルも開いていたらしいが、それ以降は公の場でのピアノ演奏はごくわずかの例外を除いて行っていない。

## II. 筋力低下の始まり

ショスタコーヴィチの右手の異常は1958年、55歳のときに端を発するというのが定説である。1954年の夏には自転車での遠乗りで息子のマキシムの自転車についていけなかったという記述<sup>3,5)</sup>があって、Kalapatapu らは、これは下肢の運動障害の症候であり、このとき既に発症していたのではないかという想像をしている



が、51歳の男が16歳の悪童と自転車で同等に走れないのはそれほど不思議なことではないと筆者は考える。1958年5月上旬、ショスタコーヴィチはモスクワを出て、プラハ、チューリヒ、ローマ、フィレンツェ、パリと約3週間の旅に出た。パリでは芸術文化勲章授与の壮麗な式典に出席し、アンドレ・クリュイタンス（André Cluytens；1905-1967）の指揮、ショスタコーヴィチ自身のピアノによる記念演奏会では、自作のピアノ協奏曲第1番と第2番がパリの聴衆に披露された。このパリ楽旅時のEMIによる正規録音が残っている（1958年5月24～26日、パリのサル・ワグラムでの収録とある）が、ショスタコーヴィチはこのパリでの演奏会が症状に気づいた最初だ、ということ友人であるイサーク・グリークマン（Исаак Давыдович Гликман；1911-2003）への手紙で述べている<sup>3,5)</sup>。

私の右手はとても弱くなっている。時々“pins and needles（しびれが切れたときのびりびりする感覚）”がある。重い物は持ち上げることができない。私の指でどんなスーツケースもつかむことはできるが、コートをフックにかけることができない。歯を磨くことは難しい。右手が疲れたと感じると、ピアノでゆっくりとピアノニッシモで弾くしかできない。この状態を私はパリでの演奏会で初めて感じた：私はまともに弾けなかった。この病気が何であるのか、高名な医師たちは答えることができなかった。彼らは私に病院に留まれと宣告するだけだった。

### Ⅲ．筋力低下を演奏者としてのパフォーマンスから類推する

このショスタコーヴィチ自身のピアノ、アンドレ・クリュイタンス指揮フランス放送管弦楽団による2つのピアノ協奏曲は世評の高かった録音で、これだけ聴いていると、ショスタコーヴィチがグリークマンへの手紙で書いてあるような「まともに弾けなかった」状態とはとても思えない。本当に「まともに弾けない」状態であれば、誇り高いショスタコーヴィチが正規の録音としての発売を許すはずもないだろうと思われる。では、この演奏は彼のベストフォームか。このEMI録音の2年前にあたる1956年（月日は不詳）、ショスタコーヴィチはソ連の指揮者サムイル・サモスード（Самуил Абрамович Самосуд；1884-1964）とモスクワ・フィルハーモニー管弦楽団をバックに、自作のピアノ協奏曲第1番をソ連国営のレコード会社メロディアから発表している。指揮者があまり有名でなく、録音状態

がいまひとつ冴えないこともあって、クリュイタンス指揮のバリ録音と比べてあまり話題にならない音源だが、ここでのショスタコーヴィチは自由闊達に駆け回るという表現がピッタリなぐらい澁澁とした演奏をしており、高音部の音列の粒立ちのよさもリズムの決まり方も素晴らしい。これと比べると、バリ録音は全体的にテンポが遅く、同音連打は粒が揃わないし強弱の付け方が甘い印象がある。曲を知り尽くした作曲家の自作自演とは思えない。

ショスタコーヴィチ自身が演奏した商業録音は1960年以降存在しない、と書いたが、唯一例外がある。ショスタコーヴィチは親友のヴァイオリニストであるダヴィッド・オイストラフ（Давид Фёдорович Ойстрах；1908-1974）のためにヴァイオリン・ソナタ第1番を作曲し、1969年5月3日にスヴァトスラフ・リヒテル（Святослав Теофилович Рихтер；1915-1997）のピアノ伴奏で初演、これは実況録音が残っている。初演に先立って1968年12月に、作曲者とオイストラフはショスタコーヴィチの自宅でプライベート録音を残しており、どちらの録音もソ連の国営会社メロディアから発売になっている。大ピアニストリヒテルは粒立ちのよい、キラキラしたダイナミックなピアノでオイストラフのヴァイオリンとほとんど対等にわたり合っている。これと比べること自体が酷であることは百も承知だが、<sup>とつとつ</sup>としたピアノで時折十分に音が鳴っていないんじゃないかと感じさせるような演奏である。しかし、すべてを知り尽くしている自作とはいえ、最後まで弾き通していること自体は驚きである。右手から発症した10年後でも、ピアノ演奏が可能なくらいゆっくりとした進行を示す神経疾患であるということになる。

1962年11月12日ゴーリキー・フィルハーモニー管弦楽団のショスタコーヴィチ・コンサートの第1部で、祝典序曲とチェロ協奏曲を指揮。指揮者としてのショスタコーヴィチの登場はこれ1回きり。後年、彼は「自分が自作曲を指揮していないのは、腕に力が入らないからだ」と語っている<sup>4)</sup>。

### Ⅳ．筋力低下を写真から類推する

インディアナ大学のKalapatapuら<sup>2)</sup>は、1960年代中葉に撮られた写真から、ショスタコーヴィチは会話、スピーチ、ピアノ演奏の際に左手を主に使うようになったことがわかる、彼が右手を使っている写真を探し出すことは困難である、と述べている。ミシェル・R・ホフマン（Michel-Rostislav Hofmann；1915-1975）による





Fig. 1 アンドレ・クリュイタンスとショスタコーヴィチ  
第11交響曲の下稽古で。1958年、パリ。ミシェル・プロドスキー蔵。  
ミシェル・R・ホフマン（著）、清水正和、振津郁江（訳）：ショスタコー  
ヴィチ。音楽之友社、東京、1982より転載



Fig. 2 ショスタコーヴィチ自作自演のピアノ協奏曲第1, 2番の  
LPジャケット  
オーケストラはアンドレ・クリュイタンス指揮パリ音楽院管弦楽団。



Fig. 3 フランス音楽使節団との交流の席で  
1962年、モスクワ。左から、ショスタコーヴィチ、レオニード・コーガ  
ン、ティフォン・フレニコフ、ミシェル・R・ホフマン、リュベラ・プロコ  
フィエフ夫人、ジョルジュ・オーリック。  
ミシェル・R・ホフマン（著）、清水正和、振津郁江（訳）：ショスタコー  
ヴィチ。音楽之友社、東京、1982より転載

評伝（1963年発行。ショスタコーヴィチ存命中に出版されて  
いる。1982年に清水正和、振津郁江訳で『不滅の作曲家ショ  
スタコーヴィチ』として音楽之友社から刊行されている）<sup>6)</sup>で  
はショスタコーヴィチの健康状態に関する記述は一切  
出てこないが、ショスタコーヴィチの写真がふんだん  
に載せられている。1958年パリ楽旅でアンドレ・ク  
リュイタンスと第11交響曲の楽譜を見ながら議論し  
ている写真（Fig. 1）では右手でページをめくっている。  
また、1958年パリ録音のLPのオリジナルジャケット  
（Fig. 2）では、右手で煙草を持つショスタコーヴィチ  
の顔が大きく映し出されている。1962年、フランス  
音楽使節団との交流の席での写真が載せられている

が、ここではショスタコーヴィチは右手を掲げて演説  
している（Fig. 3）。1961年、ユーリー・シャポーリン  
（Юрий Александрович Шапорин；1887-1966）と写った写真  
では右手で楽譜（？）に何か書いているように見える  
が、ペンの持ち方が心なしに不自然に見えるのではな  
い（Fig. 4）。

一方、1963年11月29日、ロンドンのコヴェント  
ガーデン王立歌劇場で行われた自作の歌劇「カテリー  
ナ・イズマイロヴァ」西側初演のリハーサル休憩時間  
でのスナップでは、左手で煙草を持っていることがわ  
かる（Fig. 5）。1965年以降は心臓発作のため医師から  
喫煙を禁止されており、彼が煙草を吸っている写真は  
見当たらない。

## V. ショスタコーヴィチは治癒への期待を 捨てなかった

ショスタコーヴィチは回復のための努力を惜しまな  
かった。西側旅行から帰った直後の1958年9月を皮  
切りに、平均すると1年間に1カ月間以上の頻度で主  
にモスクワの病院での入院加療を繰り返している。  
ショスタコーヴィチは自分の症状について時に皮肉交  
じりで冷笑的に語ることはあっても、決してあきらめ  
ることはなかったようである。Wilson<sup>3,5)</sup>は、作曲者の  
その後の筋力低下の経過を経時的に次のように記載し  
ている。

1960年、息子マキシムの結婚式の席上で、彼の下肢





Fig. 4 ユーリー・シャポーリン (左) とショスタコーヴィチ  
1961年、ベルリン。グリゴリ・シュネルソン蔵。  
ミシェル・R・ホフマン (著)、清水正和、振津郁江 (訳): ショスタコー  
ヴィチ、音楽之友社、東京、1982より転載

は突然その正体を現し、左足の骨折をきたした。7年後には右足を骨折し、その後ずっと見た目にもびっこを引くようになった。自制的なユーモアをもって、彼は病院からグリークマンに手紙を送っている。「われわれは75%のところにいる。私の右足は壊れ、左足も壊れた。右手はだめになっている。あとは左手だけだ。左手が壊れれば私の四肢はすべて100%使用不能ということになる」。

1965年の終わりに、レニングラードの医師D. K. Bogarodinskyは、ショスタコーヴィチの疾患が、神経終末と骨をおかすpoliomyelitisの1種であると診断した。この診断について、ショスタコーヴィチはジョークのように「ガキの病気」と笑い飛ばしていたが、一方で、歩行や自分の手が使いにくくなることへの屈辱感をどんどん不愉快に思うようになっていた。

Fay<sup>4)</sup>によるとショスタコーヴィチの病名が明らかになったのはモスクワの病院で再び長期入院していた1969年秋で、「脊髄性小児麻痺」の稀な症例であるという診断が下った、と記載されている。日本語訳では「poliomyelitis=ポリオ=小児麻痺」という流れになってしまうが、レニングラードの医師もモスクワの医師も、意味するところは脊髄灰白質障害であって、感染症としてのポリオを念頭に置いた診断でないことは確実である。上位運動ニューロン障害のない、かつて日本でもよく使われていた病名である脊髄性進行性筋萎縮症 (SPMA) に近い概念の病気と診断した、というこ



Fig. 5 ロンドンのコヴェントガーデン王立歌劇場で  
1963年11月29日。「カテリーナ・イズマイロヴァ」西側初演のリハー  
サル休憩時間。左手で煙草を持っている写真である。

とであらうと思われる。

Fay<sup>4)</sup>は次のようにも述べている。

治療するどころか、病名すら確定できないまま、八年も診察、治療を受けていた彼が、皮肉な言葉を吐くのも理解できる。それより驚くべきは、さまざまな苦痛にさいなまれ、着実に肉体が衰える中で、ショスタコーヴィチが粘り強く回復に望みを抱いていたことである。通常彼は退屈な長期入院にも、医師の診察にも、さまざまな手当て、療法にもおとなしく従った。外国に行けば専門家の診断を仰いだ。東洋風の漢方調合薬や代替療法も試してみた。シャギニャンがくれた日本製の磁気ブレスレットに対しては、一九六七年一月に、これからはそれを身につけてその奇跡を呼ぶ効能を信じる、と手紙で謝意を表した。

1966年、ショスタコーヴィチはグリークマンにこのように書いている<sup>3,5)</sup>。

私が病院にいるとき、Michelson 教授 (外科医) と Schmidt 教授 (脳神経内科医) の診察を受けた。2人とも私の手足の状態に非常に満足しているようだった。結局、私がピアノを弾けないことや階段を非常な苦勞なしでは登れないという事実は大きな意味はないということだった。あなたはピアノを弾く必要はない。階段を昇るのは避けなさい。とにかく家にいなさい、滑りやすい歩道や段差をほつつき歩く必要はない。誠に正しい。昨日私は散歩に出かけて、転んで膝を激しくぶつけた。家にいたらこんなことは起こらなかつただろうね。この他のことはすべて順調に進んでいる。以前と同じ



ように私は煙草も飲酒もできない。やりたいという誘惑はある。でも、私のばかげた恐怖心がそういう誘惑よりも強いのです。

1970年3月、シベリア在住の整形外科医ガブリエル・イリザロフ（Гавриил Абрамович Илизаров；1921-1992）の治療を受けている。イリザロフ医師はあるオリンピック選手の複雑骨折の回復と競技復帰を手助けしたことで一躍名を上げた人のようで、ショスタコーヴィチは多大な期待を抱いたようである。3月末にはシャギニャーンに次のように報告した<sup>3,5)</sup>。

気分は良くなり、手足にもいくぶん力が入るようになりました。ピアノも弾いています。それも速く、強く。ここ3、4年、そんなふうに弾けたことはまったくありません。

3カ月公に姿を見せなかったが、5月までショスタコーヴィチの健康状態は上向き続け、6月にはすっかり元気になってモスクワに帰れるだろうと、希望を抱くほど回復した。その頃、彼ができるようになったと自慢していたのは、階段を昇る、（困難を伴うが）バスに乗る、右手でひげを剃る、ボタンをかける、口に持っていく途中でスプーンを落とさない、といったことであった。再びピアノが弾けるようになったのは特に重要だった。もとの技量で弾けるようになるまでには時間がかかるだろうと悟っていたが、次のシーズンでは聴衆を前に演奏できるかもしれないと夢想した。

しかし、ショスタコーヴィチの状態は客観的に著明に改善したというわけではどうもなさそうである。1970年12月、レニングラードでショスタコーヴィチに会ったグリークマンは、そのときの様子について、歩くのが大変そうで右手は以前と変わらず弱かったと語っており、1971年5月に5カ月ぶりにモスクワでショスタコーヴィチに会った際にも、友人の健康状態が相当悪化しているとも、シベリアでの治療の成果が顕著に見られるとも感じなかった、と記述している。1973年1月16日にはショスタコーヴィチは病院からグリークマンに手紙を出している<sup>3,5)</sup>。

日常生活に関してはほぼ完全にお手上げです。1人では着替えもできず、顔も洗えないような状態です。頭の中で、どこかのバネが外れてしまいました。交響曲第15番以来、1つの音符も作曲していません。ぼくとしては恐ろしい状況です。

ショスタコーヴィチは1973年に米国旅行を行い、ノースウェスタン大学の名誉博士号を授与されている。この時点でショスタコーヴィチの病状はかなり悪化しており、米国行き自体が危ぶまれる状況であった

が、この旅行の大きな目的の1つはベセスダのNIHで診察を受け、米国の医師から前向きな診断を引き出すことであったと述べている。残念ながら、進行性の、治療法のない麻痺性疾患と心疾患に明らかに罹患しているという結論を受けたにすぎなかった。この後、1975年の呼吸困難による死亡まで、怪しげな民間療法を含めて、ショスタコーヴィチの治癒に向けての試みは止まることはなかったという。

## VI. ショスタコーヴィチはALSか

全経過17年余り、右手から発症して四肢全体がおかされているが左右差はずっと維持されており、“pins and needles”という記述はあるが、少なくとも他覚的な感覚障害はなさそうである。しかし、詳細な神経学的所見を記載した記録や筋電図、神経伝導検査所見の詳細な記載は少なくとも公にはなっていない。ベセスダでの診療記録が見つければ大きな手掛かりになるであろうと想像されるが、当時のソ連の医療レベルも決して低いものではなく、脳神経内科医による診療記録の発掘が望まれる。診察した医師によって上位運動ニューロンの障害が指摘されたことはない。頸椎の異常を指摘された記録はなく、頸椎症性脊髄症ではないと解釈するのは妥当であろうと思われる。死の直前まで旺盛な作曲活動は続いていた数々の傑作を産み出しており、知的機能は保たれていた。また、右手の機能は完全には廃絶しておらず、遺作のヴィオラ・ソナタの楽譜を、苦勞しながらも右手で書く能力は残存していたようである。

クレムリン病院でショスタコーヴィチは最後の手紙を書いている<sup>3,5)</sup>。

親愛なる Krzysztof：私を覚えてくれてありがとう。手紙をありがとう。私は肺と心臓に問題があってまた入院している。なんとか右手で書こうとしているがとても困難だ。なぐり書きを容赦してほしい。

Best wishes to Zosia, a warm handshake.

D. Shostakovich

P.S. ヴィオラ・ソナタを書くのはとても困難だ。

左右差のある進行性の四肢運動障害を軸に現在の目でショスタコーヴィチの診断を類推すると、可能性がある疾患は次の3つかと思われる。



## 1. 上位運動ニューロンの障害があまりはつきりせず、かつゆっくり進行する ALS

彼を診察したどの医師も ALS という言葉を使っていないのは注目すべきであると思う。しかし、筆者が神経内科医としてスタートした当初は、日本では患者に ALS という病名を告げるのはタブーであった。1960 年代のソ連ないし欧米で ALS の告知がどのようになされていたかについて筆者は知識がなく、診察した医師たちが ALS と考えながらも ALS と告知するのをためらっていたかどうかは知る由もない。しかし、少なくとも、脊髄灰白質の疾患であるという認識に関してはほぼ共通であったものと思われる。筆者もこのゆっくり進行する ALS である可能性が最も高いのではないかと考えている。

## 2. 封入体筋炎

中年以降の男性に好発する左右差を有する神経筋疾患の代表格として、封入体筋炎 (inclusion body myositis : IBM) は考えられない疾患ではないと思う。しかし、ショスタコーヴィチが死去した 1975 年にはやっと Bohan and Peter の筋炎診断基準<sup>7)</sup> が出版されたばかりで、IBM という臨床概念は十分には確立されておらず、IBM の診断基準が提唱されたのは 20 年後の 1995 年<sup>8)</sup> である。当時の脳神経内科医がこの疾患を念頭に置きショスタコーヴィチを診療していたとは思えない。したがって、IBM であった可能性は残ると筆者は考える。しかし、上に述べたショスタコーヴィチ自身による自分の症状の記載「重い物は持ち上げることができない。私の指でどんなスーツケースもつかむことはできるが、コートをフックにかけることができない」からは、IBM に特徴的な症状である手指屈筋にアクセントのある障害を想像することは難しいように思う。

## 3. 多巣性運動性ニューロパチー

多巣性運動性ニューロパチー (multiple motor neuropathy : MMN) の概念がスタートするきっかけとなった Lewis, Sumner らによる論文<sup>9)</sup> が出たのは 1982 年であり、疾患概念としての MMN がほぼ確立したのは 1980 年代後半になってのことである。当然ながらこの疾患を当時の医師は知る由もないし、免疫グロブリン治療などというものも存在しない。しかし、一側の上肢からの症状スタートというのは本疾患によく見られる特徴の 1 つであり、可能性の 1 つとして十分考えられる疾患であると筆者は考える。また、ショスタコーヴィチ自身が自分の筋力低下について、何をしてもまっすぐ悪

くなっていくだけと自覚していたわけではなく、ある種の治療で改善した、またピアノが弾けるようになった、などと書いている点は、MMN に代表される寛解増悪を示すことのある疾患も念頭に置く必要はあるかもしれない。

しかし、この症状の変動に関してはかなり疑問がある。治療によるショスタコーヴィチの筋力改善を積極的に支持していたのはシベリアのイリザロフ医師のみであったようで、彼を長年にわたって診療していた「モスクワの権威たち (脳神経内科医も含まれる)」が希望的コメントを残したという記録はない。また、長年の友人グリークマンも、ショスタコーヴィチが改善したと言っている一方で不変、ないし徐々に悪化を示していることを冷静な目で語っている。「よくなりたい」と願いつける患者による希望的観測にすぎない発言、と言ってしまったら冷淡にすぎるだろうか。

## VII. ショスタコーヴィチと音楽幻聴

ここから後は全然別話である。オリヴァー・サックス (Oliver Sacks ; 1933-2015) に『Musicophilia』<sup>10)</sup> という著作があって、筆者は米国に学会出張したときに本屋で安売りをしていたのを見つけて (16.95 ドルでした) 購入したが、なかなか面白い本である (早川書房から大田直子氏の訳で邦訳が出ている。邦題は『音楽嗜好症』)。この第 6 章は音楽幻聴 “musical hallucination” という題名がついており、この中にショスタコーヴィチの名前が出てくる。その部分を紹介してみよう。

ある 33 歳の男性も、横たわって休息している時だけ音楽幻聴を体験した。「ベッドの上で横になる動きが引き金になって数秒の間に音楽が出現します (中略) しかし、私が立ち上がったたり座ろうとする、または頭をほんの少し持ち上げようとするだけで、音楽は消えてしまいます」。彼の音楽幻聴はいつも歌で、独唱の場合も合唱であることもあった。彼はそれを「私の小さなラジオ」と呼んだ。彼は手紙の最後に、「私はショスタコーヴィチのことを聞いたことがある。もっとも、私はショスタコーヴィチと違って頭に金属片は入っていない」と書いている。

この文章にはオリヴァー・サックス自身が注を付けている。1983 年のニューヨーク・タイムズに、Donald Hanahan という人がショスタコーヴィチの脳外傷について書いている。Hanahan 氏は、まったく証拠のないことだが、この作曲家はレニングラード包囲戦の際にドイツ軍の榴散弾に当たったことがあり、数年後の X 線





Fig. 6 戦闘服に身を固めたショスタコーヴィチ  
レニングラード包囲戦の頃の写真と思われる。

検査で頭の聴覚野に金属片が存在することがわかった、という噂があると記している。Hanahan氏はさらに続けて、

しかし、ショスタコーヴィチは金属片を取り除くのは気が向かない様子だった。無理もない。彼はこうに言った：そのかけらがそこにあるから、頭を一方に傾けるたびに音楽を聴くことができる。毎回違うメロディーで彼の頭は満たされる — それを作曲に使うのだと。頭をもとの位置に戻せば、すみやかにその音楽は消えてしまう。

その後私（オリヴァー・サックス）が、ショスタコーヴィチの歴史と音楽に関する研究者である Nora Klein に聞いたところ、「その榴散弾の話は、戦争中にどこかで活字にされた単なるナンセンスにすぎないです（中略）ショスタコーヴィチは敵機がブンブン飛んでいる最中に屋根に登ったりはしなかったし、なにしろ第7交響曲（レニングラード）の第1楽章を書くのに忙しかつたですから」とのことだった。Klein博士はさらに付け加えた：「そんな作り事を広めるのが、ソヴィエト官僚のいつもの気晴らしでね」。

1941年6月にドイツのソビエト侵攻が開始され、レニングラードにいたショスタコーヴィチは3回にわたって兵役を志願したがいずれも却下されている。その後、7月中に彼は、焼夷弾による攻撃から屋根を守る音楽院の消防隊に配属された。ただ実際に、焼夷弾を消し止める機会は一度もなかった<sup>4)</sup>らしい。Fig. 6はこの頃撮影された、戦闘服に身を包んだショスタコーヴィチの写真で、闘う市民の象徴として広く宣伝に使われたものらしい。レニングラード包囲戦の最中、彼は砲弾から逃げ回ってひたすら部屋にこもって作曲に没頭していたか、という問いにはNoと答えそ

うで、屋根によじ登ったということもありそう思うが、実際に砲弾に当たったならば当局のプロパガンダに利用されそうなもので、たぶんそういう事故は起こらなかったんだろうと筆者は想像する。

では、1983年のニューヨーク・タイムズの記事はまったくの絵空事か。出所を調べてみると、『The Musical Times』という雑誌の一文<sup>11)</sup>に行き当たった。著者の Dajue Wang 氏は北京の脳神経内科医である。以下に訳出する。

1950年代のこと。私（Wang氏）は新米の外科医として（このときWang氏は外科のレジデントだったのだろうか）、ある1人の作曲家と同国人の、高名な脳神経外科医と話をする機会があった。以下がそのとき彼から聞いた話である。

「戦争が終わってすぐのことである。1人の新患が私のクリニックを訪れた。一目で私はわが国の最も高名な作曲家であることがわかった。通常の予診の後では彼が困っていることは何かと尋ねたが、彼は、1つの金属片が自分の脳の中に埋まっていた、それを除去すべきかどうかについて意見が欲しいということであった。私は少し驚いて、私はおそらくあなたにアドバイスを差し上げることはできると思うと答え、その金属片はどこから来たものかを尋ねた。彼は答えた：『戦争中に私は包囲された市中にいた。1発の砲弾が私の近くの街路で爆発して負傷してしまった。その際の治療は十分なものではなく、頭の中に金属片があることが見つかったのは私が回復した後だった』。

私は彼を放射線部に連れて行って写真を撮り、どこに金属片があるかを調べた。金属片は脳の深部にあり、私は除去したほうがよいのではないかとアドバイスした。しかし、彼はこのアドバイスにどうも従いたくないようだった。彼はどうして気が進まないかを語った：『金属片が頭に入ってから、ある方向に頭を傾けるたびに音楽が聞こえる。私の頭はメロディーで満たされる — それが毎回違う — それを私は作曲に使っている。頭の位置をもとに戻すと音楽はストップする』。

今度はもう一度彼を放射線部に連れて行って、透視下で観察した。スクリーンには彼の頭蓋骨のアウトラインが映り、その中に金属片があるのがわかった。私は彼に頭を動かすように指示したところ、金属片が脳の中で動くのがわかった。この動きから、どうもこの金属片は、左側脳室の temporal horn にあると推定できた。まさに聴覚と関連する場所だ。

私はこのような症例に遭遇したことがなく、そのようなアドバイスが最も適切か見当がつかなかった。そこ



で私の上級医——陸軍のsurgeon-generalでわが国のリーダーたる脳神経外科医——にコンサルトした。彼は患者と写真を診て、金属片はそのままにしたほうがよいというアドバイスを患者に与えた。彼は微笑んで、『いずれにせよ、ドイツの砲弾はよいことをしたということだね。彼の作曲の手助けをしたんだからね』。

これが私の聞いた話である。誰のことを言っているかわかりますね？ そう、ドミートリー・ショスタコーヴィチです。でも、この話はいろいろ問題があることも事実である。まず本当か？ 私は個人的には疑っていない。私はこのソヴィエトの医師をよく知っている。彼は真摯で真面目な医師であり、このエピソードを誠実に語ってくれた。彼もその上級医ももうこの世の人ではないが、2人とも脳神経外科の世界では国際的によく知られた存在である。たくさんの事実がおそらく証明できるだろう。ショスタコーヴィチは確かに包囲戦の際にレニングラードにいた。しかし、どの伝記にも彼が戦争で負傷したとは書いていない。彼のメディカル・レコードは、X線写真を含めて存在するであろうと思われるが、それにアプローチする許可が得られるとは思えない。負傷したのが本当だとすると、次の疑問がある。どうしてそのことは秘密とされてきたのか？ 戦時中のショスタコーヴィチの音楽が国家的シンボルとなっていたことからくるソヴィエト政府の判断か？ あるいはショスタコーヴィチ自身の判断によるものか？ 長年繰り広げられてきた党の理想の音楽との確執を恐れていたのか？

秘密になっていた理由が何であれ、このような脳損傷はショスタコーヴィチが言っているような症状を出すのだろうか。側頭葉への圧迫病変、特に脳腫瘍で音が聞こえるということはよく知られた事実である。私も雑音が聞こえるという患者を何人も調べたことがある。しかし、私の記憶では音楽が聞こえるという患者にでくわしたことはない。

最後に——このことは最も好奇心をそそることであるが——おそらく1941～1943年の間に起こった出来事であり、この前後でショスタコーヴィチの音楽に明らかな変化が起こっただろうか。彼は戦前から既に多作の作曲家であり、このような偶発的なインスピレーションはその後の作品制作のペースに特に大きな影響を与

えたとは思えない。しかしながら、この外傷アクシデントが彼の音楽スタイルに変化をもたらしたか。これは識者の意見を聞く必要があるだろう。

## おわりに

ショスタコーヴィチの脳外傷がその後の彼の旺盛な創作活動に寄与したとすれば、筆者ならずともナチス・ドイツの砲弾に謝辞を述べなくてはならないところだが、最後のエピソードはこの謎に包まれた人格に捧げられた神話と考えるのが適切だろうと思われる。しかし、17年余りの間彼を悩ませてきた筋力低下が、ショスタコーヴィチの創作活動に大きな影響を与え続けてきたことは紛れもない事実だろうと思う。1954年、まだ筋力低下の自覚のないときにスターリンの死と前後して発表された第10交響曲——筆者はこれが彼の最高傑作ではないかと考えている——は、重苦しい音の流れが連続する中でも最終楽章には開放的なカタルシスが待っているが、1962年以降に作曲された最後の3つの交響曲（第13番、第14番、第15番）は、重苦しいだけでなく聴き手を持続的に、極度に緊張させるものが存在する。

極度の緊張は演奏者側も実感するようで、筆者は1998年12月、マレク・ヤノフスキ（Marek Janowski; 1939-）指揮のNHK交響楽団が定期演奏会で第15交響曲を演奏したとき、第1楽章冒頭でピッコロ奏者が失神して演奏が頓挫した現場に居合わせたことがある<sup>12)</sup>。「お医者さんはいませんか」のアナウンスに応じて楽屋のピッコロ奏者を診にいったが、こういうことがあるとオーケストラ全体の緊張の糸は解けてしまうようで、演奏の仕切り直しということにはならず当日の演奏会は中止となってしまった。日本初演の際の冷淡ぶりとは打って変わって、現在では第15交響曲はショスタコーヴィチの最高傑作の1つと評価されているが、筆者はいまもって第15番のライブの演奏を聴けないでいる。ショスタコーヴィチの晩年の作品には底知れぬ闇が存在する。この闇には彼が苦闘してきた神経筋疾患の影が大きく投影されていると思うが、筆者はまだその十分な説明ができないでいる。

- 文献
- 1) ソロモン・ヴォルコフ (編), 水野忠夫 (訳): ショスタコーヴィチの証言. 中央公論社, 東京, 1986
  - 2) Pascuzzi RM: Shostakovich and amyotrophic sclerosis. *Semin Neurol* **19(Suppl 1)**: 63-66, 1999
  - 3) Kalapatapu VR, Gilkey AP, Pascuzzi RM: Shostakovich and ALS. Bogousslavsky J, Hennerici MG, Bärner H, Bassetti C (eds): *Neurological Disorders in Famous Artists: Part 3*. Karger, Basel, 2010, pp92-100
  - 4) ローレル・E・ファーイ (著), 藤岡啓介, 佐々木千恵 (訳): ショスタコーヴィチ — ある生涯. アルファベータ社, 東京, 2002
  - 5) Wilson E: Shostakovich: A Life Remembered. Princeton University Press, Woodstock, 1994
  - 6) ミシェル・R・ホフマン (著), 清水正和, 振津郁江 (訳): ショスタコーヴィチ. 音楽之友社, 東京, 1982
  - 7) Bohan A, Peter JB: Polymyositis and dermatomyositis (second of two parts). *N Engl J Med* **292**: 403-407, 1975
  - 8) Griggs RC, Askanas V, DiMauro S, Engel A, Karpati G, et al: Inclusion body myositis and myopathies. *Ann Neurol* **38**: 705-713, 1995
  - 9) Lewis RA, Sumner AJ, Brown MJ, Asbury AK: Multifocal demyelinating neuropathy with persistent conduction block. *Neurology* **32**: 958-964, 1982
  - 10) Sacks O: Musicophilia: Tales of Music and the Brain. Vintage Books, New York, 2008
  - 11) Wang D: Shostakovich: music on the brain? *The Musical Times* **124**: 347-348, 1983
  - 12) ビッコロ奏者が椅子から転げ落ち……演奏中止となった N 響 “主客” の反応. *週刊朝日* **93**: 177, 1988

BRAIN and NERVE 73 (12): 1309-1318, 2021 Topics

#### Title

Shostakovich and Right Hand Weakness

#### Author

Takashi Kanda

Department of Neurology, Yamaguchi University Graduate School of Medicine, 1-1-1 Minamikogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan

#### Abstract

Russian composer Dmitri Dmitrievich Shostakovich (25 September 1903–9 August 1975) is sometimes considered to be a famous person who suffered from ALS. However, there are no medical records that mention that his asymmetric weakness was due to ALS, and the exact diagnosis of his illness, which lasted over 17 years, is still obscure. The aim of this paper is to consider what kind of neurological disorder this great composer of the 20th century suffered from based on his piano recordings, photographs, and documents written by his colleagues.

**Key words:** Shostakovich; amyotrophic lateral sclerosis; poliomyelitis; pianist

## MEDICAL BOOK INFORMATION

医学書院

# 手に映る脳，脳を宿す手

## 手の脳科学16章

### The Hand and the Brain; From Lucy's Thumb to the Thought-Controlled Robotic Hand

原著 Göran Lundborg

監訳 砂川 融

●A5 頁272 2020年

定価: 本体3,600円+税

[ISBN978-4-260-04257-4]

手は脳の延長、と聞くと不思議に思う人もいるかも知れない。道具を使うだけでなく、手はさまざまな創造を担い、芸術を生み出す。運動器官であるばかりではなく、感覚器官でもある。いつも何気なく使う手は知られざる役割を担っている。手外科の大家が、人類進化から電動義手まで手にまつわる多種多様なテーマを縦横に語り尽くし、読者の知的好奇心を満たすエキサイティングな16章。手の壮大な物語を堪能しよう。